知久平遺跡群

昭和56年度　下久堅地区畑灌水工事
埋蔵文化財立合調査報告書

1983・3

長野県南信土地改良事務所
長野県飯田市教育委員会

知久平遺跡群

昭和56年度　下久堅地区畑灌水工事

埋蔵文化財立合調査報告書

1983. 3

長野県南信土地改良事務所
長野県飯田市教育委員会

序

県営畑地帯総合土地改良事業として今回飯田市下久堅地籍について農業の近代化による散水施設工事が行われることになりましたが，かねてよりこの地帯には庚申原遺跡・内御堂遺跡等埋蔵文化財の存在が確認されていましたので文化財保護の見地から，工事実施と同時に飯田市教育委員会に委託して遺跡の立合調査を行ったものであります。

今回の調査にあたって果樹園・桑園地帯で，調査には11月～3月の厳寒期にもかかわらず，樹間の狭い溝の中で困難を極めましたが，綿密なる調査によって北の原工区亀平工区知久平工区の全般にわたって，縄文中期より室町時代遺跡の全容を確認することが出来，多くの成果が得られ，古代に対するロマンと興味を深めるものであります。

報告書が出版されるにあたり，改めて文化財保護記録保存の意義を高く評価すると共に，調査に当たられた佐藤甦信調査団長をはじめ，関係各位のご努力に厚くお礼申し上げる次第であります。

昭和58年3月

南信土地改良事務所下伊那支所長

宮　下　広　人

例　　言

1. 本書は昭和56年度下久堅地区畑地帯総合改良事業による灌水工事区域内の庚申原・観音原・藤塚原・川原・宮ノ平・内御堂・向新道地遺跡・知久平城跡についての立合調査報告書である。

2. 立合調査は灌水管溝幅50cm，本管幅70cm，深さ70cm余が亀平工区では12m，他は15m間隔に掘られ，その溝内の調査によるもので，土層の変化による落ちこみと，遺物の検出によって遺構を確認したものである。それらを各遺跡ごとの検出遺構位置図と表1に記載した。

3. 配管溝は機械による掘削のため，遺物の大半は小片となり，また1遺構の出土量も少ない。遺物の図は主なものにとどめた。

4. 川原遺跡では昭和44年度トレンチ調査による結果を資料として掲載した。

5. 本書の編集，執筆は佐藤が，遺構位置図・遺物の作図は佐藤が，製図は佐藤・田口・牧内が分担し，写真は佐藤が担当した。

6. 遺物は飯田市考古資料館に保管してある。

目　　次

序 …… 2
例　言 …… 3
目　次 …… 3
Ⅰ　環　　境 …… 5
Ⅱ　立合調査経過 …… 10
　　立合調査日誌 …… 10
Ⅲ　立合調査結果 …… 13
Ⅳ　ま　と　め …… 16
図　版
調査組織
おわりに

挿　図　目　次

図１　下久堅地区畑灌水配管立合調査遺跡位置図及び周辺主要遺跡図（１：50,000）…… 5
図２　庚申原・観音原遺跡と周辺遺跡詳図（１：10,000）…… 6
図３　川原・宮ノ平・内御堂・向新道地遺跡，知久平城跡詳図（１：7,500）…… 7
図４　庚申原遺跡立合調査検出遺構位置図（１：2,000）…… 16
図５　庚申原遺跡出土遺物（１：４）…… 16
図６　藤塚原遺跡立合調査検出遺構位置図（１：2,000）…… 17
図７　川原遺跡　〃　（　〃　）…… 18
図８　〃　トレンチ出土Ⅰ類土器・土製品（１：３）…… 19
図９　〃　〃　Ⅱ類土器　（　〃　）…… 20
図10　〃　弥生時代遺物　（　〃　）…… 20
図11　〃　出土遺物Ⅳ　（１：４）…… 21
図12　〃　配石遺構 …… 21
図13　〃　Ａ１号住居址 …… 22
図14　宮ノ平遺跡立合調査検出遺構位置図（１：2,000）…… 22
図15　内御堂遺跡・知久平城跡立合調査検出遺構位置図（１：2,000）…… 23
図16　宮ノ平遺跡出土遺物（１：４）…… 24
図17　内御堂遺跡出土遺物（１：４）…… 24
図18　知久平城跡及び周辺図 …… 25
図19　向新道地遺跡立合調査検出遺構位置図（１：2,000）…… 26

I　環　　境

昭和56年度飯田市下久堅地区畑地帯総合改良事業による灌水工事区域内の遺跡には，北から庚申原・観音原・藤塚原・川原・宮ノ平・内御堂・向新道地遺跡がある。

飯田地方は東に赤石山脈が連なり，西に木曽山脈が聳え，その中間を天竜川が南流してその両側に見事な段丘が発達している。天竜川の東岸ー竜東地区は背後に赤石山脈の前面に中山性の伊那山脈が，鬼面山(1889m)，氏乗山(1818m)，金森山(1702m)となって赤石山脈と並走している。伊那山脈の東面は急峻な断崖をなすが，西面は数列の断層をもちながら段丘面に達し，天竜川西岸―竜西地区に比し，山麓からのびる扇状地は狭小で段丘面の幅員も全般的に狭いが豊丘村から喬木村にかけての段丘の発達は著しく，特に北から田村原・林原・伴野原・帰牛原・伊久間原と続く伊那谷中位段丘面の幅は広く，典型的な段丘地形を形成している。下久堅に入ると中尾・庚申原と規模は小さくなるが，伊久間原と続く段丘面をもつが，それ以南は富田沢・岩沢・宮の沢・塩沢・知久沢・いたちが沢などの本支流によって侵蝕され，段丘面は細かく分断されており，小段丘を形成しているが多くは段丘と気づかれない程の狭い傾斜地形を形成している。

庚申原遺跡は北は岩沢，南は富田沢の支流の深い侵蝕谷に切られ，東西300m，南北50～180mの洪積中位段丘面にあり，東は，東からの丘陵と岩沢の侵蝕で切られ，西は緩い段丘崖となって下位の北原段丘面となる。標高490～500mの東西方向の扇状地形をなしている。

庚申原遺跡の周辺の遺跡をみると北の岩沢を隔てた中尾遺跡では昭和54年発掘調査では縄文早期末と晩期住居址16軒が，これに続く一段下位の天神遺跡では縄文早期末と縄文後期住居址9軒が調査されている。一段上位段丘にある大原遺跡では昭和53年度調査で有舌ポイントの出土をみ，縄文早期・中期中葉の住居址7軒と集石炉2基が発掘調査されている。

観音原遺跡は庚申原段丘崖下にある北原段丘面の北に小さな沢で切られた孤立する台地にあり，南北180m，東西100mの楕円状の平坦地形にあり，北は岩沢の，南は小さな沢の侵蝕谷に切られ，西は比高差70mの急峻な

図1　下久堅地区畑灌水配管立合調査遺跡位置図及び周辺主要遺跡図（1：50,000）

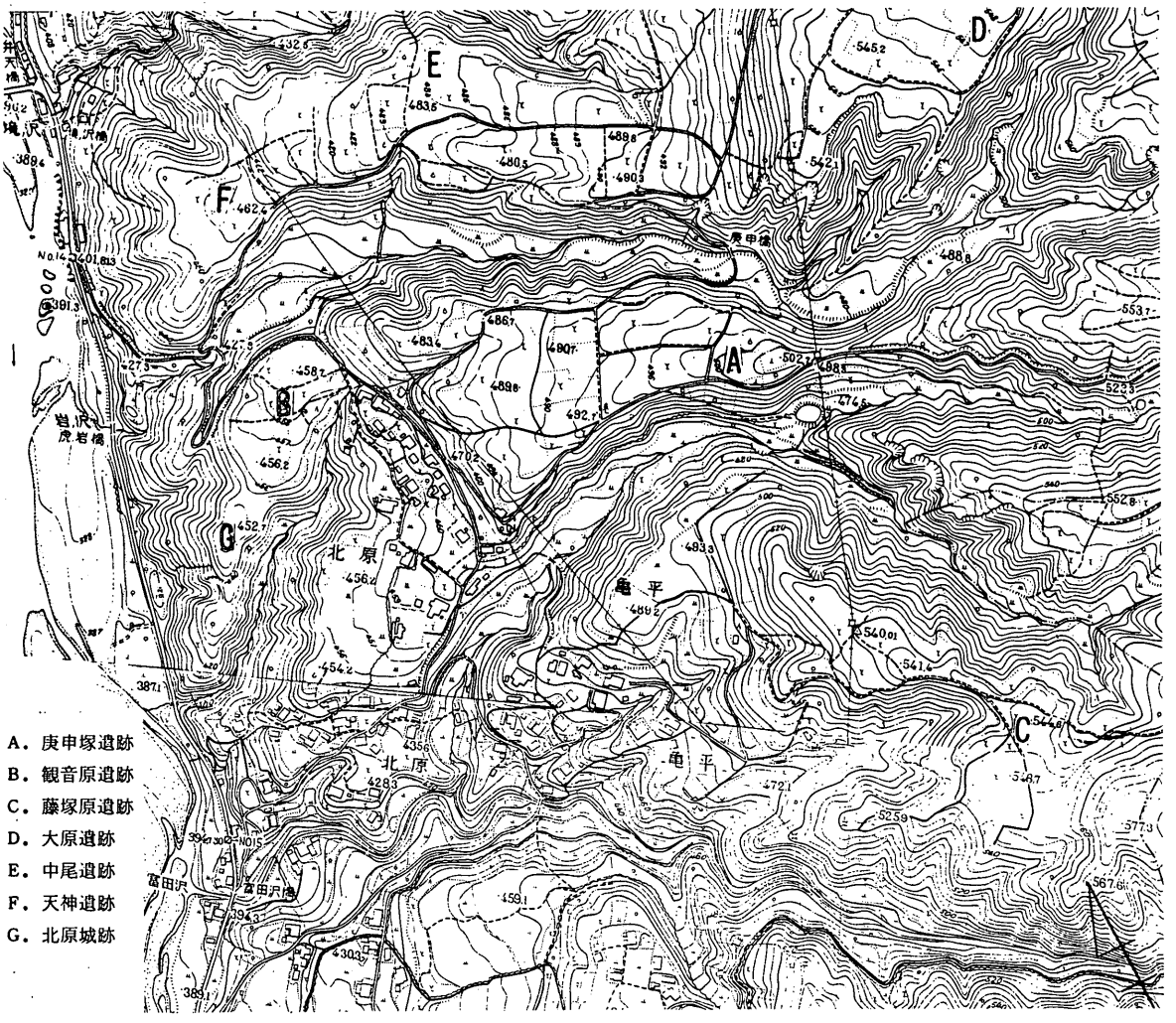


図２　庚申原・観音原遺跡と周辺遺跡詳図（１：10,000）

段丘崖となって天竜川に至っている。標高 456～458ｍを測る洪積下位段丘面にある。

遺跡の南東の突出した小台地に中世知久氏の出城北原城跡がある。遺跡は城跡に関連する中世後半の陶器片をかつて表面採集しているが，今次立合調査では遺構・遺物は検出されなかった。

藤塚原遺跡は亀平部落の中心より比高差60ｍ余の山をのぼった上に開かれた小台地で，西と東に二つに分かれ，西は東西 100ｍ，南北50ｍ，東側は南北 150ｍ，東西80ｍ，南は富田沢に，北はその支流による深い侵蝕谷に切られ，大原段丘と同位段丘面にある孤立した残丘に立地している。

川原遺跡　天竜川は水神橋下流 900ｍで飯田市駄科と下久堅の間で峡谷をなして流れるようになる。ホッキと呼ばれるところで，この上流は川幅は広く，両岸に沖積地帯が発達しているが，西岸は広く，東岸は狭小である。水神橋下流 350ｍ東岸の堤防上の道路を隔てたリンゴ畑が遺跡である。南北 150ｍ，東西50ｍの沖積段丘面にあり，標高 382ｍを測る。天竜川との比高４ｍの低地であるが，北側は堅い基盤に囲

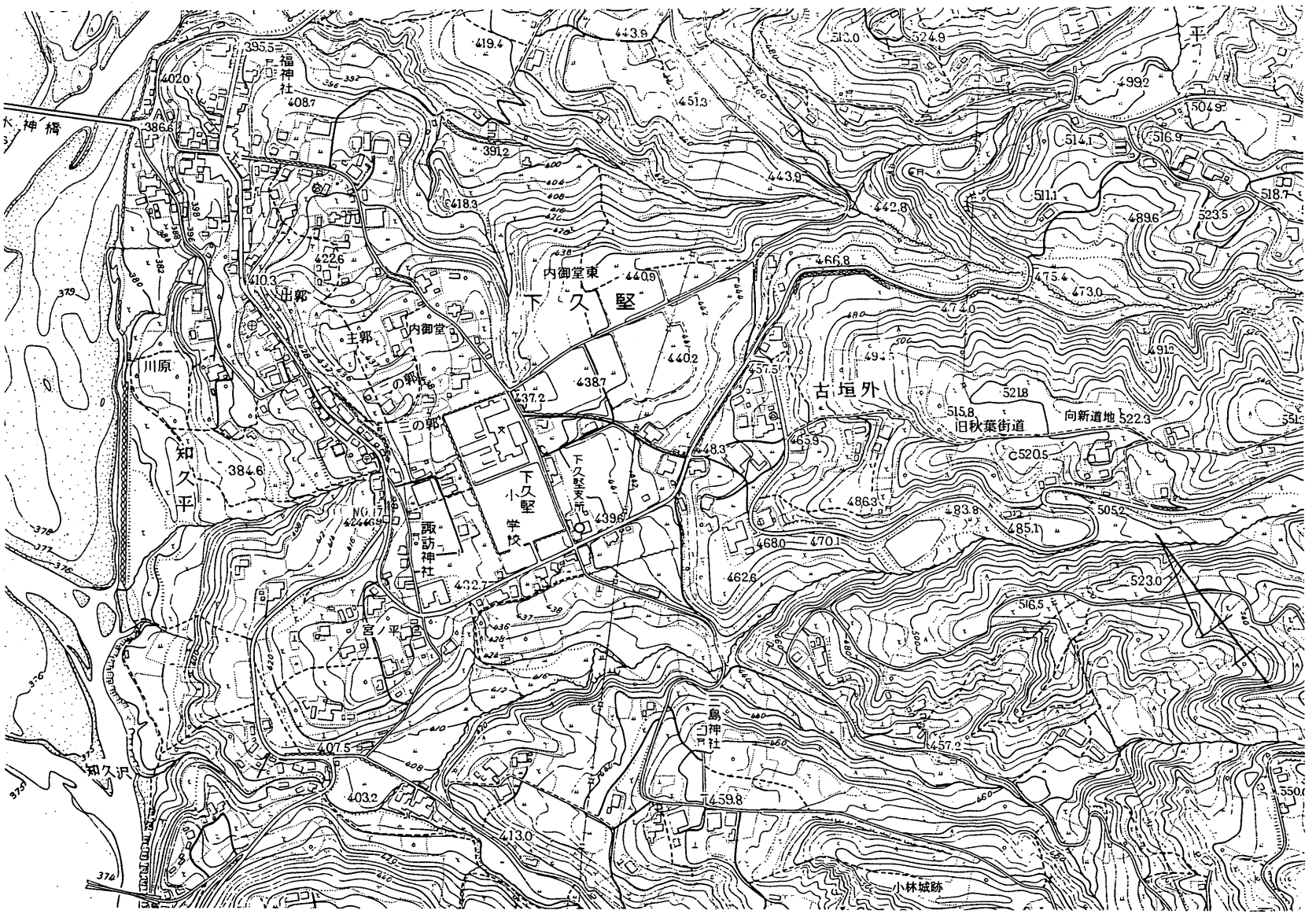


図3　川原・宮ノ平・内御堂・向新道地遺跡，知久平城跡詳図（1：7,500）

まれ，天竜川の洪水による流失を防いでいる。36年災害には10～20cmの氾濫の砂をかぶっている天竜川沿岸最低位の遺跡として注目されている。

昭和44年14月末～45年正月，トレンチ調査を行ない，上層より弥生中期末住居址1軒の存在を確かめ，下層より，縄文晩期初頭から縄文後期中葉にかけての土器片の多くの出土をみている。

内御堂遺跡・宮ノ平遺跡・知久平城跡

遺跡のある知久平段丘面は下久堅で最も広い平坦面をもつ地帯である。標高430～440m，南北500m，東西200～300mの範囲に遺跡はある。北は塩沢，南は知久沢の高距35～40mの深い侵蝕谷に切られ，西から北にかけては高距35mの段丘崖で下位段丘面となり，さらに20mの高距をもって天竜川氾濫原となる。天竜川との比高差60mを測る。東は傾斜地となって上り，伊那層よりなる丘陵が東に高まって続く。

内御堂遺跡は台地の北側にあって知久平城跡を含む南北200m，東西300mの範囲にあり，微地形をみると，西に知久平城跡があり，その東に塩沢の支流の谷頭侵蝕が南に扶って進んで遺跡を二分する地形をなしているが，その侵蝕は近年になって谷を深めたものといわれ，同一地形にあったものである。ここには城跡の外部をめぐる堀があった所である。

かつては南に諏訪神社の南，下久堅公民館から東にかけて遺跡をとりまく状態に湿地帯であったとみる。公民館建設時の基礎工事にみられた深い泥と粘土の堆積，昭和55年発掘調査時にもローム層はなく泥と粘土の堆積が遺跡の東をとりまく状態で発見されている。

知久平段丘面の南側を国道152号が通り，その両側に下久堅支所，公民館，小学校，農協，郵便局があり，地区の中心地となっている。国道を隔てた南西に突出した台地に宮ノ平遺跡がある。南北130m，東西100mの範囲にあり，標高430mを測る。

内御堂遺跡では昭和55年発掘調査によって縄文前期，古墳時代後期住居址3軒と中世屋敷跡1が調査されており，特に知久氏の知久平に本拠を構えた時期を知る資料を得ている。宮ノ平遺跡は土師器，須恵器片の多くが表面採集された所である。

歴史的環境をみると，内御堂遺跡の大半を占めているのが知久平城跡である。丘陵と平地を利用した平山城であり，北西端部に本丸，その南と東に4条の屈曲する空堀を順次めぐらし，二の丸，三の丸を構築し，三の丸に続く惣曲輪には更に3条の堀が穿かれており，南の知久沢の段丘崖となる。北には出丸とみる城の神と呼ばれる突出部があり，規模の大きな城跡である。現在城跡は宅地・果樹園・水田等となり，そのため堀は埋められ塁壁は破壊された面は多くみられるが城跡の構造を知ることができる。

知久平城構築の過程の概略をたどると，平安時代後半竜東地域―伴野庄は上西門院領であり，鎌倉時代のはじめ諏訪氏の同族神氏は現上伊那郡箕輪町から知久平に移り，知久氏を名のり，自ら頼朝の御家人となり伴野庄の地頭となって実権を握るようになった。知久氏の領有する知久郷は北は小渋川から南は万古川までの竜東一円の地であり，さらに座光寺・上郷の一部にまでいたっている。知久氏は文永年間（1270頃）に文永寺を建立し，現在重要文化財となっている五輪塔を造っている。五輪塔石室天井裏の銘文には

弘安六年癸未十二月二十九日　神敦幸造

南都石工菅原行長　左衛門尉神敦幸　生年六二歳

とあり，1283年奈良より石工を招き五輪塔を建造している。また諏訪の諏訪神社上社に普賢堂・五重塔を建立し，銅鐘を鋳造している。

知久氏の本拠は上久堅柏原の神ノ峰城とされているが，それは戦国動乱期に入ってから神ノ峰に山城を築き，そこに移ってからである。それ以前の本拠は知久平に館を構たとみられる。天文19年（1550）の

「諏訪上社神使御頭之日記」には，

「知久本郷・知久柏原・知久虎岩　是ハ知久殿被押候……」とあって伊那郡では三郷をあげている。柏原は神ノ峰城のある地，虎岩は知久平の北にあり，知久平は知久本郷となっており，知久氏の館を構えた地であったことを示すものである。館の所在は知久平城本丸の位置と推定されている。東西・南北90m余の平坦な所であり北と西は急な段丘崖となり，東から南にかけては湿地帯であり，防備の面と天竜川を隔てた伊賀良庄の本拠に対する位置にもある。

武田信玄は天文23年（1554）文永寺・安養寺を焼き神ノ峰を攻め，伊那は武田の支配下となり，知久氏は一時滅ぶ。天正10年（1582）武田氏滅亡，織田信長の支配となり毛利秀頼飯田城主となるが，まもなく信長本能寺に倒れ，徳川家康の支配地となり，郡司菅沼小大膳を置く。知久氏は本領安堵されて神ノ峰城に帰る。天正11年（1583）菅沼氏は知久平城の築城にかかり，翌12年知久氏を三河で自害させ，神ノ峰城は廃城となる。

天正18年（1590）豊臣秀吉と徳川家康との和議がなり，家康は関東に移り，伊那は秀吉の支配地となり，菅沼氏は上州吉井へ所替となる。毛利秀頼が再び飯田城主となり，その死後京極高知が後を継ぐ。関ケ原戦後慶長６年（1601）伊那は徳川氏の支配地となり，小笠原氏が飯田城主となり，知久氏は３千石の旗本となり阿島に館を構え，幕末にいたっている。

菅沼氏の伊那支配は７年間であり，この間秀吉と家康の対立のはげしい時期であり，知久平城の築城は完成をみずに飯田に移されているが，その規模は大きく，中世終末期の城郭を示すものとしては重要である。

内御堂周辺の遺跡をみると，知久平台地の南縁部に馬出し遺跡があり，これから西の縁部にかけて平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器片が多く採集されている。知久沢を隔てた南の小林神社前遺跡には古墳時代後期の住居址５と中世住居址１が畑総事業による灌水工事に伴う立合調査で発見されており，その一段高い丘陵には知久氏の支城小林城跡がある。さらに南の南原には知久氏建立の文永寺があり，重文の五輪塔がある。東南東の丘陵の東の断層縦谷に孤立する神ノ峰は知久氏が後に本拠を構えた神ノ峰城跡である。

向新道地遺跡　知久平段丘面から比高差80mの傾斜面の畑を上った所に東西方向に広がる丘陵に残る南北30～100m，東西300mの台地にあり，標高500～522mを測る。牧之内原と呼ばれており，向新道地遺跡の中心は，東100mの東面の傾斜地にあり，この原の東側が遺跡の西端部にあたるとみられる。

Ⅱ　立合調査経過

昭和56年度，下久堅地区畑地帯総合改良事業による畑灌水工事が，北原・亀平・知久平地域に行なわれることになった。

北原工区には，庚申原・観音原遺跡があり，亀平工区は藤塚原遺跡の所在地である。知久平工区には，川原・内御堂・宮ノ平・向新道地遺跡がある。このため，工事中に立合調査を南信土地改良事務所の委託により，飯田市教育委員会が調査を実施したものである。

工事請負業者は北原工区を平和工業ＫＫ，亀平工区を吉川建設ＫＫ，知久平工区平坦面から川原を北沢建設ＫＫ，上段面は平和工業ＫＫである。四地区に分散しており，工事進行によって各遺跡の調査を行ってきた。

立合調査日誌

10月 7 日（はれ・くもり）	北の原工区	庚申原立合調査	遺構なし
10月12日（はれ）	〃	〃	〃
10月15日（はれ）	〃	〃	
20区 ― 庚申原１号・２号・３号住居址検出			
10月20日（はれ）	北の原工区	庚申原調査	遺構なし
10月24日（くもり）	〃	〃	〃
10月27日（はれ）	〃	〃	〃
10月31日（はれ・くもり）	〃	〃	〃
11月 1 日（はれ）	〃	〃	〃
11月 4 日（くもり）	〃	〃	〃
11月 5 日（くもり）	〃	観音原調査	〃
11月 8 日（はれ）	〃	〃 ・庚申原調査	〃
	知久平工区	内御堂調査	〃
11月17日（はれ）	〃	宮ノ平15区―１号～６号住居址検出	
	〃	川原調査	
11月18日（はれ）	〃	川原調査６区―１号～４号住居址検出	
	〃	宮ノ平15区―７号～12号住居址検出	
11月19日（はれ）	〃	川原５区・６区―５号～７号住居址検出	
		〃 〃 ―中世配石遺構検出	
11月20日（はれ・くもり）	〃	川原５区―８号住居址検出	
	〃	宮ノ平15区―13号住居址検出	
	〃	内御堂10区―中世建物址土台石検出―知久氏館址とみる。	
11月21日（はれ）	〃	宮ノ平５区―14号・15号住居址検出	
	〃	内御堂・川原―配管工事なし	
11月23日（くもり・午後雨）終日調査			

	知久平工区	川原５区―９号・10号住居址検出
	〃	宮ノ平15区―16号・17号・18号住居址検出
11月24日（はれ）	北の原工区	庚申原６区―黒土の落ちこみをみるが不明
	〃	観音原　遺構なし
	知久平工区	川原・宮ノ平　遺構なし
11月25日（くもり）	〃	宮ノ平　遺構なし　調査終わる。
	〃	川原　　〃　　南側は氾濫砂の堆積となる。
	〃	内御堂７区―知久平城跡の堀を検出…北段丘崖腹をめぐる。
11月26日（くもり・雨）	〃	内御堂８区―本曲輪西堀，ｌ状の折れを検出
11月27日（雨）	〃	内御堂８区―本曲輪西堀の調査
11月28日（はれ）	〃	内御堂７区　本曲輪調査―堀・土塁・配石
	〃	〃　10区　二ノ曲輪南北方向の堀調査
	〃	川原　遺構なし
11月29日（はれ）	〃	川原　遺構なし
	〃	内御堂７区―西傾斜面の堀検出
12月１日（くもり）	北の原工区	庚申原　遺構なし　調査終了
	知久平工区	内御堂８区・７区―堀の調査，本曲輪北西端部に炭化米層
12月２日（くもり・はれ）	〃	内御堂８区　本曲輪西堀土橋の検出・確認
	〃	〃　７区　本曲輪調査　配石列検出―知久氏館址とみる。
	〃	川原　遺構なし
12月３日（はれ，凍る）	知久平工区	内御堂８区　土塁調査
	〃	〃　10区　堀調査―南北方向堀が東西方向堀につく。
12月４日（はれ，凍る）	〃	内御堂８区　１号・２号住居址検出
12月５日（はれ・くもり）	〃	内御堂９区　３号・４号・５号・６号住居址検出
	〃	〃　７区　炭化米層の調査
12月７日（きり・はれ）	〃	内御堂９区　６号住居址調査，炉址検出
	〃	川原　遺構なし
12月８日（はれ）	〃	内御堂９区　７号・８号住居址検出　中世床面とみるを検出
		〃　９区東地点に建物址とみるを発見
12月９日（はれ）	亀平工区	藤塚原　遺構なし
	知久平工区	内御堂９区東地点―中世建物址検出
12月11日（はれ）	〃	内御堂９区―６号・４号住居址の再確認調査
	〃	山越地区　調査はじめる。遺構なし
12月12日（霧・はれ）	亀平工区	藤塚原　調査，遺構なし
12月14日（はれ）	知久平工区	山越地区　調査，遺構なし
	〃	川原６区　８号住居址の配管溝埋戻し作業中に石棒１こ発見
12月16日（はれ，凍る）	〃	川原　１区遺構なし
	〃	牧ノ内　調査はじめる。13・15区遺構なし
12月17日（はれ，凍る）	亀平地区	藤塚原　20区　焼土帯検出―６ｍ以上に炭・灰の堆積
12月18日（はれ，凍る）	知久平工区	山越　４・３・２区調査　遺構なし

	知久平工区	牧ノ内12区―空堀とみる落ちこみ―後日の調査に
	〃	川原　1・2区　遺構なし
12月19日（くもり）	亀平工区	藤塚原　調査，遺構なし，終了
12月20日（はれ）	知久平工区	山越　2・3・4区―遺構なし
	〃	牧ノ内11区　―　〃
12月21日（はれ）	〃	川原2区―中世遺構？　スリ鉢・カメ片検出
12月22日（はれ）	知久平工区	川原　工事なし
	〃	山越　2区調査　遺構なし　終了
	〃	牧ノ内　中世遺構とみる地形調査
12月23日（はれ）	出土遺物洗い	写真整理
12月24日（はれ）	〃	整理
12月27日（はれ）	知久平工区	川原　2区―遺構なし
	〃	牧ノ内　14区―空堀検出，マウンド地形に中世遺構，
	〃	〃　17区―1号住居址検出
12月28日（はれ）	〃	川原5区―中世遺構とみるを検出，中世陶片出土，川原終了
12月29日（くもり・午後雨）	〃	牧ノ内　17区―堀検出，6区―遺構なし
1月8日（はれ）	〃	〃　16区―堀検出…神ノ峯城跡の砦址とみられる。
	〃	〃　5区　遺構なし
1月13日（はれ）	〃	〃　19・20区調査，遺構なし

全区域の立合調査を終了する。

現場調査終了後，遺物整理・遺構図・写真等の整理をなし，調査概報（立合調査日誌）を作成する。報告書提出は次年度となっており，昭和57年度になって報告書作成にとりかかる。

Ⅲ　立合調査結果

配管工事は，北原・知久平工区の配管の間隔は15m，亀平工区は12m，それらをつなぐ本線が掘りこまれる。配管はミニバックホーンで掘られるため溝幅50cm（本線は70cm余）深さ70cm以上となる。

庚申原・観音原・藤塚原・向新道地遺跡は耕土下はローム層となるため調査は比較的容易であった。宮ノ平・内御堂遺跡は耕土の黒色土は20～40cmと深く，その下に暗褐色があってローム層となる。竪穴覆土は暗褐色土，褐色土となって床面となる。このため遺構判別は容易でないものがあった。川原遺跡は，上層に36災にかぶった砂の層が10～20cmあり，その下に災害前の耕土の黒色砂土があって，灰褐色砂土となり，灰褐色砂土に竪穴は掘りこまれ，覆土は黒色砂土で埋まる。

確認された遺構は各遺跡別にその位置を示し，表１にまとめた。

下久堅地区昭和 56 年度畑潅水工事立合調査遺構確認表（表１）

（例）庚申原遺跡　１住…１号住居址，配管区20，Ｗ１・Ｎ３…配管区20の西より１列目，北より３列目の配管立上がり，それよりＳ1.3…南1.3ｍ，Ｎ3.2…北3.2ｍの間に竪穴住居址の掘りこみがある。深さ45…表土より45cmの深さに床面がある。

遺構No.	配管区No.	位置	深さ cm	時期	備考・遺物
庚申原遺跡（図４）					
１住	20	Ｗ１・Ｎ３　Ｓ1.3～Ｎ3.2ｍ	45	縄文中期中葉	床面堅い，勝坂式土器片
２住	〃	Ｗ１・Ｎ３　Ｓ4.8～Ｓ9.4ｍ	45	〃	〃　〃
３住	〃	Ｗ２・Ｎ２　Ｓ3.2～Ｓ7ｍ	45	〃	〃 東へ向く　〃
藤塚原遺跡（図５）					
焼土帯	20	Ｎ１・Ｗ１　Ｓ６ｍ・Ｅ３ｍ Ｎ不明	40	不明	10cm前後の厚みに炭・灰の堆積，床面堅く焼土
川原遺跡（図６）					
１住	6	Ｎ３・Ｅ３　Ｗ2.4～6.6ｍ	50	弥生後期	床面堅い　土器片
２住	〃	Ｎ３・Ｅ３　Ｅ2.5～7.2ｍ	70	弥生中期？	〃　〃
３住	〃	Ｎ３・Ｅ４　Ｗ1.7～Ｅ3.4ｍ	50	〃　後期	〃　〃
４住	〃	Ｎ４・Ｅ３　Ｗ2.3～7.6ｍ	60	〃　中期？	〃　〃
５住	5	Ｎ５・Ｅ４　Ｅ１～6.4ｍ	40	〃　後期	床面堅い　Ｅ４ｍに炉址 土器片 上層国分式土師器片
６住	〃	Ｎ２・Ｅ２　Ｅ３～８ｍ	60	中世	山茶碗片
７住	〃	Ｎ２・Ｅ３　Ｗ4.3～9.4ｍ	60	弥生後期	土器片
８住	〃	Ｎ１・Ｅ３　Ｗ0.2～4.4ｍ	60	縄文後期？	石棒
配石遺構	6	Ｎ４・Ｅ３配石　Ｅ3.5ｍ　Ｅ５～5.7ｍ　Ｗ５ｍ	40	中世	建物址とみる　陶片
	5	Ｎ１・Ｅ２　配石Ｗ0.5ｍ 〃　Ｗ1.3ｍ	40 45	〃 〃	〃 〃

遺構No.	配管区No.	位置	深さ cm	時期	備考・遺物
配石遺構	5	N1・E3 配石 W10m	40	中世	建物址とみる　陶片
		〃 E0.4～W3.6	50	〃	
	〃	〃 〃 E1.6m	40	〃	〃
	〃	N2・E2 〃 E1m	40	〃	〃
9住	5	N2・E3 E1～5.5m	58	弥生後期？	覆土木炭を含み床面堅い
10住	〃	N4・E3 E2～6m	55	〃	〃　〃
宮ノ平遺跡（図7）					
1住	15	A点 S4～9m	60	古墳時代後期	土師器片
2住	〃	〃 S9.1m～13m	60	〃	3住の上に張り床 鬼高Ⅱ式土器片
3住	〃	〃 2住の下にあり，S1mに南壁	70	〃	鬼高Ⅰ式土師器片 3住の下に大半がある
4住	〃	〃 S2m～N3m	60	〃	土師器片
5住	〃	C点 N3m～S2m	55	〃	〃　須恵器片
6住	〃	B点 S5～9.5m	60	〃	〃　〃
7住	〃	B点 S2m～W1	60	平安	土師器，灰釉陶器
8住	〃	D点 S0.8～6.4m	80	古墳時代後期	土師器，須恵器片 10住を切る
9住	〃	E点 E1.2～5.2m	70	〃	土師器片
10住	〃	D点 8住に切られる E2.4m東壁	60	〃	土師器，須恵器片 8住に切られる
11住	〃	F点 S不明 N3.2m	60	〃	土師器片
12住	〃	⊠点 S1.5～5.7m	60	〃	土師器片　須恵器片
13住	〃	⊠（電磁弁）W3.4m・E1m	45	〃	〃 15住に切られる
14住	〃	B点 W2～6m	60	平安	カマド東壁につく 土師器片　須恵器片
15住	〃	⊠（電磁弁）W2.5m～9m	75	古墳時代後期	13住を切る 土師器片
16住	〃	〃 E3～6.4m	40	平安	須恵器片
17住	〃	〃 E13～16.7m	40	古墳時代後期	土師器片
18住	〃	〃 E18.1～24.3m	50	〃	〃　須恵器片
内御堂遺跡（図8）					
1住	8	N1・E2 S5.1～S10m	60	縄文中期後半Ⅲ	床面堅く炭多し 土偶手部片，打石斧1
2住	〃	S1・E1 N0.3～4.7m	55	中世末	床面堅い 中世陶片　スズリ片
3住	9	P点 N4.7～9.6m	70	古墳時代後期	土師器片
4住	〃	W3・N2 S1.6m～北西に入る	70	〃	床面堅い 土師器片
5住	〃	P点 W5～13m	70	〃	西端にカマド 土師器片　須恵器片

遺構No.	配管区No.	位　　置	深さ cm	時　　期	備　考・遺　物
6住	〃	B点（本管の東へ折れ） E 6.7～11 m	90	縄文中期後半Ⅲ	石囲炉址 上層より山茶碗片 土器片 打石斧1，石錘1
7住	〃	A点 W5～10m	75	古墳時代後期	土師器小片
8住	〃	A点 W10.2～13m南に向う	100	縄文中期？	覆土 床面堅い 黒曜石片
知久平城跡 ― 立合調査により新たに確認された遺構（図8・9）					
空堀	7	N1・E3 E5m・W不明 N2・E2 E5m・W4m	不明	中世後半	傾斜地に東西方向に
土橋	8	本郭南側堀⊠W 31mに土橋		〃	
土塁	7	⊠（電磁弁） W 2mに南北48mにわたる		〃	
配石列	〃	W1・2・本線，S1より南に続く ∘本管C点S3m―4.8m―6.8m 焼 土 8.7m―12.8m―13.7m―14.4m―19m―20m ∘W2・S1 S2m―4m―6m ∘W1・S1 S9mに礎石	60	中世前半	青磁碗片，鉄器（釘？） 中津川窯大甕片，白磁
柱穴列 礫 詰	9	東端部 S1・E1の柱穴・礫詰 S1・E1 E2.3m（柱穴）― ―5.7m（柱穴）―E 5.7m（柱穴） S1・E1 N4.1m（礫詰）―10m（礫詰）―14.5m(柱穴・底部石) S2・E1 N3.4m（石） S1・E1 W2.4m（石）	60	中世前半	遺物なし
炭化米 堆 積	7	⊠（電磁弁）W20m D点よりN10m・E 1m	40	中世	厚さ10～20cmの炭化米の層
空堀	7	本線D点 W8.5m，S5m	不明	中世後半	主郭と出郭を切る堀
向新道地（牧之内原）（図10）					
1住	17	E2・S1 S0～N4m，W0.7m	45	平安時代	土師器小片1
空堀	14	西端W2～W3の間 W2…E 4.5m～W3―E 0.5m	不明	中世	西の谷におちる
〃	16	W2・S1 N3m～16m W3・S1 N6m～19m	〃	〃	北東で浅くなり切れる
〃	17	E2・N1 E3m～11m	〃		
〃	16	E1 E2m～W5m		〃	南北方向に両方の谷におちる
建物址？	14	E2・N2 W5.6m～15.1m	30	〃	柱穴2こあり

Ⅳ　ま　と　め

図４　庚申原遺跡立合調査検出遺構位置図（１：2,000）

図５　庚申原遺跡出土遺物（１：４）

昭和56年度，下久堅地区畑地帯総合改良事業による畑灌水工事に伴う立合調査は庚申原遺跡・観音原遺跡・藤塚原遺跡・川原遺跡・宮ノ平遺跡・内御堂遺跡・知久平城跡・向新道地遺跡等多くの遺跡があり，４地区に分散しており，工事進行に応じて各遺跡の調査を行なったものである。

庚申原遺跡はかつて分布調査の際，台地の西側に重点をおいたため，遺物の発見はなく，重要視されていなかったが，桑株抜根時に東側の墓地近くに土器片が発見され，注意をひいた。立合調査によって縄文中期住居址３軒が，東端部に発見され（図４），遺物は井戸尻Ⅲ式に比定される土器片（図５）である。

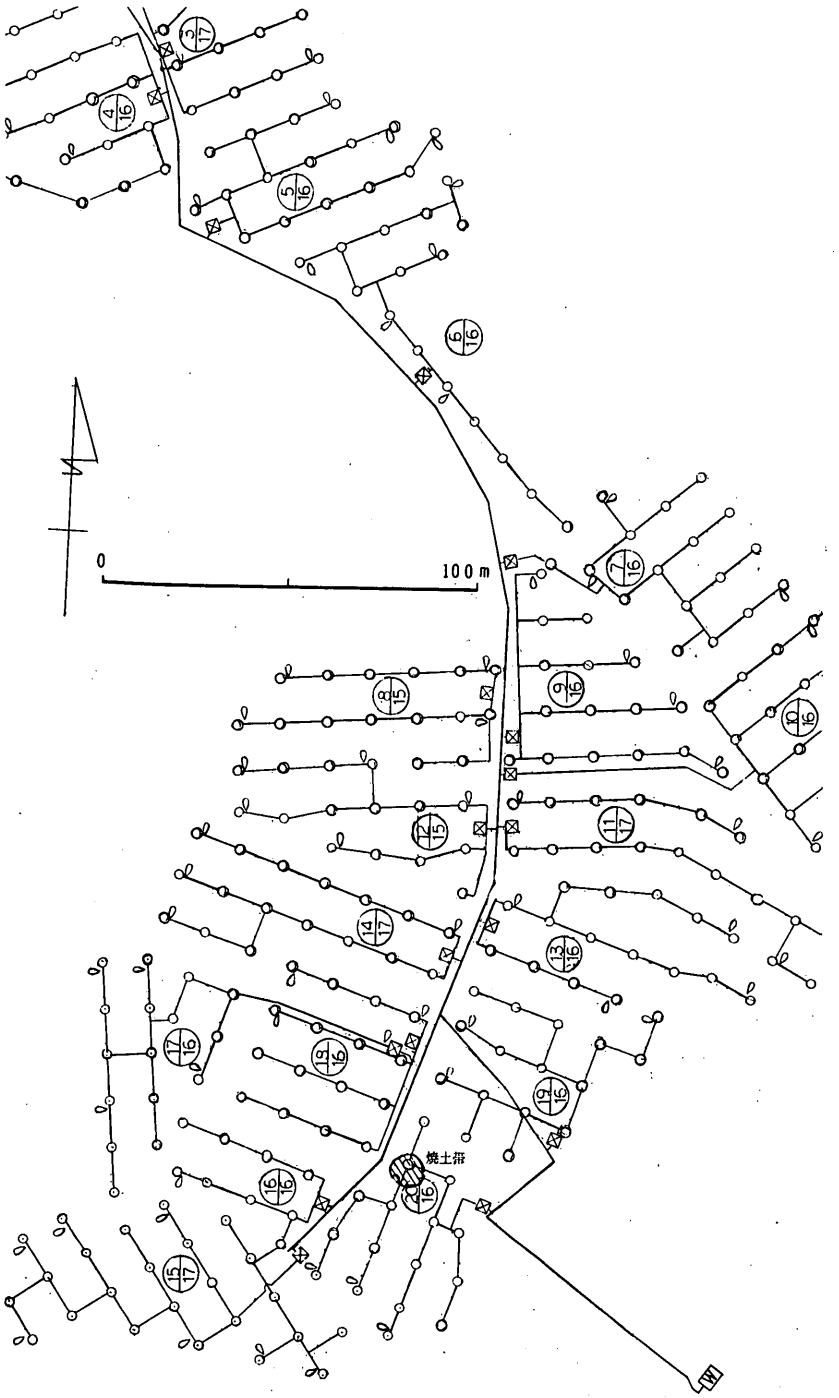


図６　藤塚原遺跡立合調査検出遺構位置図（１：2,000）

観音原遺跡は，かつて分布調査の際，縄文中期の打石斧と中世後半の陶器片が採集された。しかし今次調査では遺構・遺物の検出はなかった。遺跡の南西端の突出部には北原城跡があり，空堀がめぐり，土橋によって城跡につながっている。城跡との関連よりみて中世の屋敷址の存存が予想されるところである。

藤塚原遺跡はかつて打石鏃の出土をみている。今次立合調査では遺物の出土はなく，南端部に炭の堆積と焼土帯が検出されたが遺物はなくその時期を決めることはできなかった。覆土の状態からみると新しい時期のものとはみられなく，性格不明に終わった。

川原遺跡（図７）は，昭和44年12月末と45年正月トレンチ調査を行なった所で縄文後期・晩期，弥生中期の遺物が多量に発見され，弥生中期末の住居址１軒が検出されている。今次立合調査では，縄文後期住居址１，弥生後期の住居址８，中世住居址１と建物址とみる配石が発見されている。これら遺構は川原台地の北側に集中しており，南側はやや低地となり，遺構の発見はなくなる。出土遺物は少なく，土器は小破片のみで縄文後期・弥生後期の無文が大半を占めている。図10の11は１号住居址出土の弥生後期中

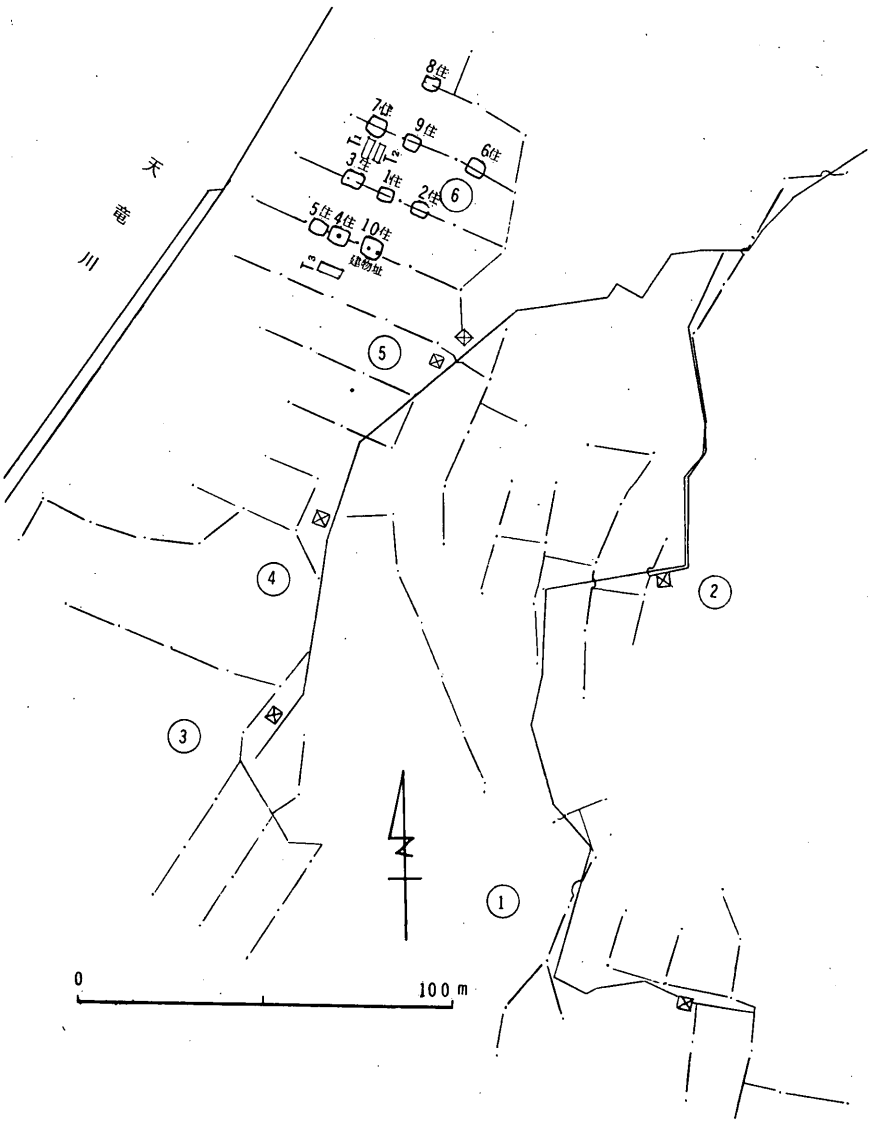


図７　川原遺跡立合調査検出遺構位置図（１：2,000）

島式の壷の破片である。図11の１は８号住居址出土の石棒で砂岩製であり，２は粘板岩製の横刃形石器とみられる。

中世６号住居址よりは山茶碗片の出土をみており，配石遺構よりは中世後半の陶器片が検出され，中世後半の建物址と推測された。天竜川を隔てた対岸に対する防御の施設があったものと思われる。

配管溝の深さは70cmであり，昭和44年12月末から45年正月のトレンチ調査はⅠ・Ⅱトレンチでは地表下75～90cmに縄文後期末から晩期初頭とみる土器が，Ⅲトレンチでは地表下90cmに弥生中期末の住居址（Ａ１号住居址）が検出され，さらに下層から縄文後期後半から中葉の土器の出土をみている。これら資料を川原遺跡を知るために記載することにした。

調査はリンゴ園に２ｍ×５ｍのトレンチを３か所に設定し，Ⅰ・Ⅱトレンチは1.5ｍの間をおいて南北方向に，Ⅲトレンチは前者より30ｍ南に東西方向に設定した。

Ⅰ・Ⅱトレンチでは地表下75～90cmに縄文晩期初頭または後期終末とみるⅡ類土器図９が出土し，100

図８　川原遺跡トレンチ出土Ⅰ類土器・土製品（１：３）

cmに人頭大から1抱え大の石を半円状に並べた配石遺構（図12）があり，縄文後期中葉のⅠ類土器図8の出土をみており，出土量は多い。

Ⅲトレンチは南にやや傾斜する地点で，地表下90cmに弥生中期末の住居址が検出され，北側を拡張調査した。西壁と東壁の1部と北東コーナーを検出し，東西4.2mの隅丸方形，暗黄褐色土層を15cm前後掘りこむ竪穴住居址を確認した。部分的調査のため柱穴は発見されなかったが炉址は，住居址のほぼ中央部にあってコの字形に石を配す石囲炉で，西側を開口している（図13）。住居址の下層125～160cmには縄文後期中葉のⅠ類土器の出土をみ，それより下層は砂礫層となっていた。

トレンチ調査の遺物（図8・9・10・11）

弥生中期末の住居址出土の遺物（図10）は少なく，土器1は袋状口縁をもつ壷の口縁部で無文，2・3は甕の口縁で，口縁直下に櫛描短線文をもつ恒川式の特徴を示すものである。その他波状文，斜行短線文

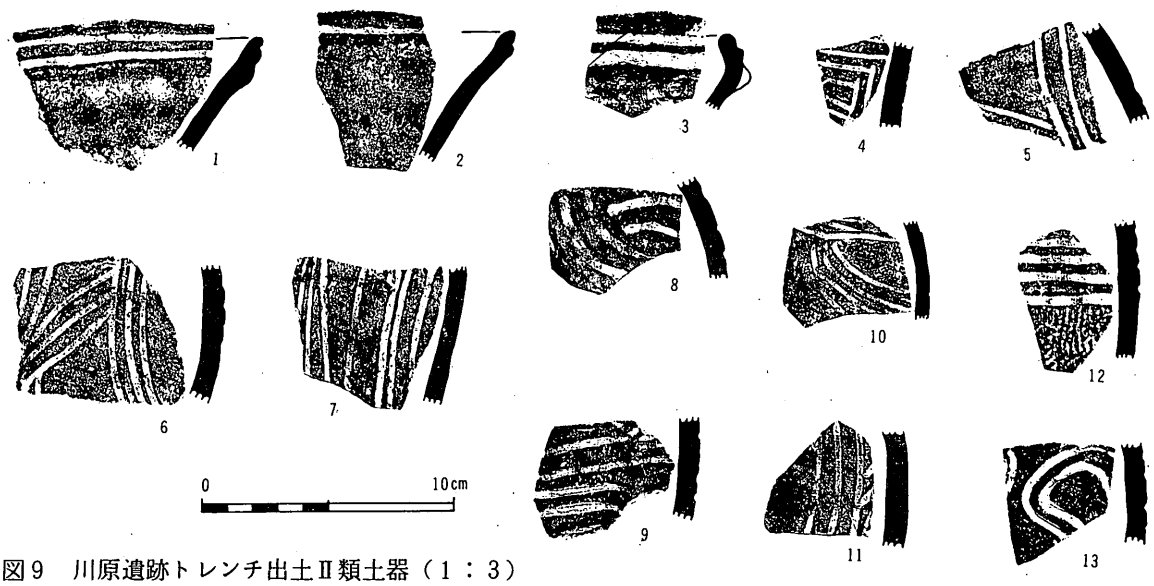


図9　川原遺跡トレンチ出土Ⅱ類土器（1：3）

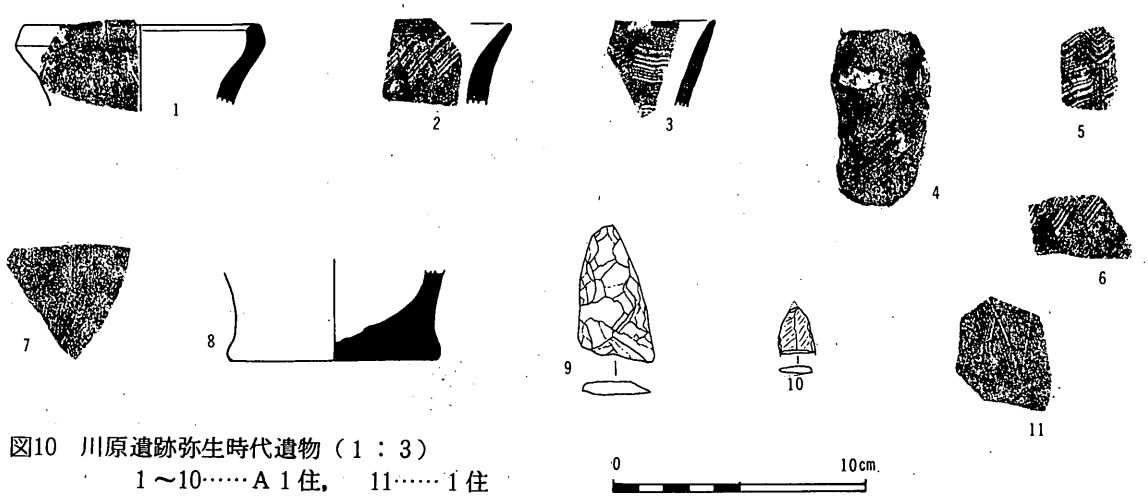


図10　川原遺跡弥生時代遺物（1：3）
1～10……A1住，　11……1住

図11　川原遺跡出土遺物Ⅳ（1：4）
1・2……8住，3～8……トレンチ，　9～12……A1住

をもつ甕の破片，図示しないが，台付甕の台部片がある。石器には図10の12の有肩扇状形石器，打製石庖丁（9），11の磨石斧・10の横刃形石器，図10の10磨石鏃，9の磨石鏃の未製品の出土をみている。

縄文後期土器の出土は多く，大きく2時期に分類される。Ⅰ類土器（図8・図11の8）はⅠ・Ⅱトレンチの配石遺構に伴う地表下100㎝の土器と，Ⅲトレンチ弥生中期末住居址下層125～160㎝にわたって出土した土器であり，出土量は多い。磨消縄文，沈線文，

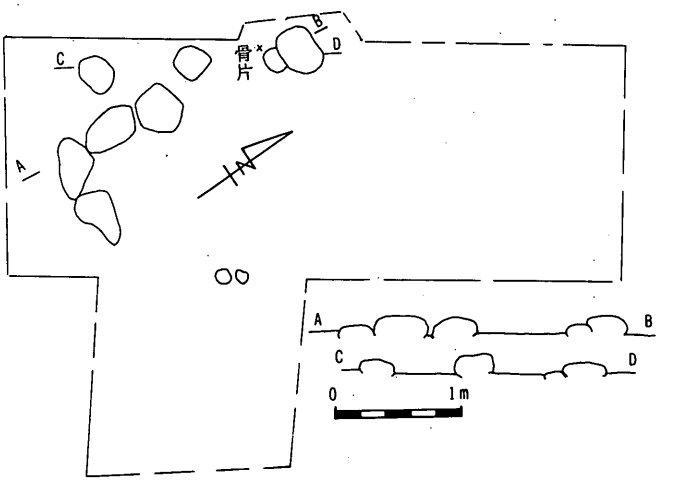


図12　川原遺跡配石遺構

刺突文，重孤文，隆帯に押引文をもつ等の有文土器と無文土器があり，深鉢，浅鉢，注口土器がある。深鉢には平縁と波状口縁があり，大半は粗製土器である。地表下155㎝出土の刺突文と隆帯縄文をもつ図８の21は岐阜県未福遺跡出土に類例があり注目される。Ⅰ類土器は加曽利Ｂ式の西日本的要素に地域性をもった土器群と考えたい。これらに伴なう石器（図11の３～７）には打石斧・小形局部磨石斧・石錘・横刃形石器があり図示以外の量も多く，剥片は多量であり，地形的にみて石器製作址とも思われるものである。

Ⅱ類土器（図９）は地表下75

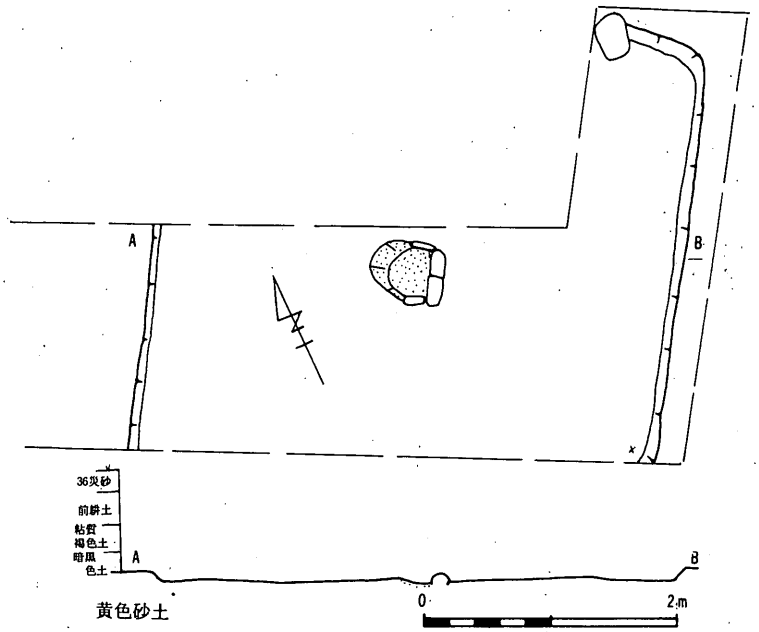


図13　川原遺跡Ａ１号住居址

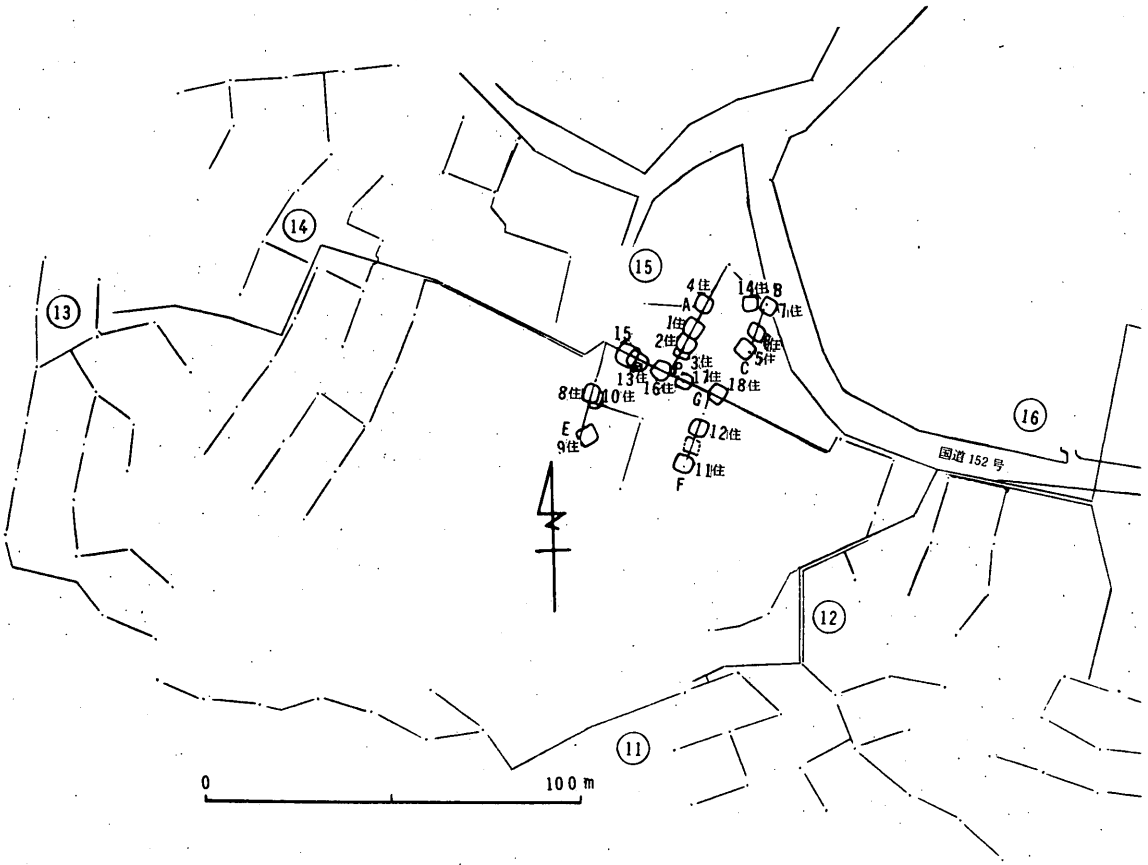


図14　宮ノ平遺跡立合調査検出遺構位置図（１：2,000）

～90cmに出土した土器で，胎土・文様とも一見弥生前期のものとも考えられたものであるが，条痕文土器は1片も発見されていない。縄文後期終末か晩期初頭のものとみたい。この土器について先学諸氏に教示を受けたが明らかな解答が与えられていない。今後の研究課題としてご指示を仰ぎたいものである。

以上からみて川原遺跡は天竜川に接す最低位に立地し，縄文後・晩期から弥生時代にわたる主要遺跡として重要視したい。

宮ノ平遺跡（図14）は配管区15に集中して古墳時代後期住居址15軒，平安時代住居址3軒が確認された。段丘面の先端部になる14配管区は立合調査前に工事を終えており未調査となったが，本管工事の立合と，

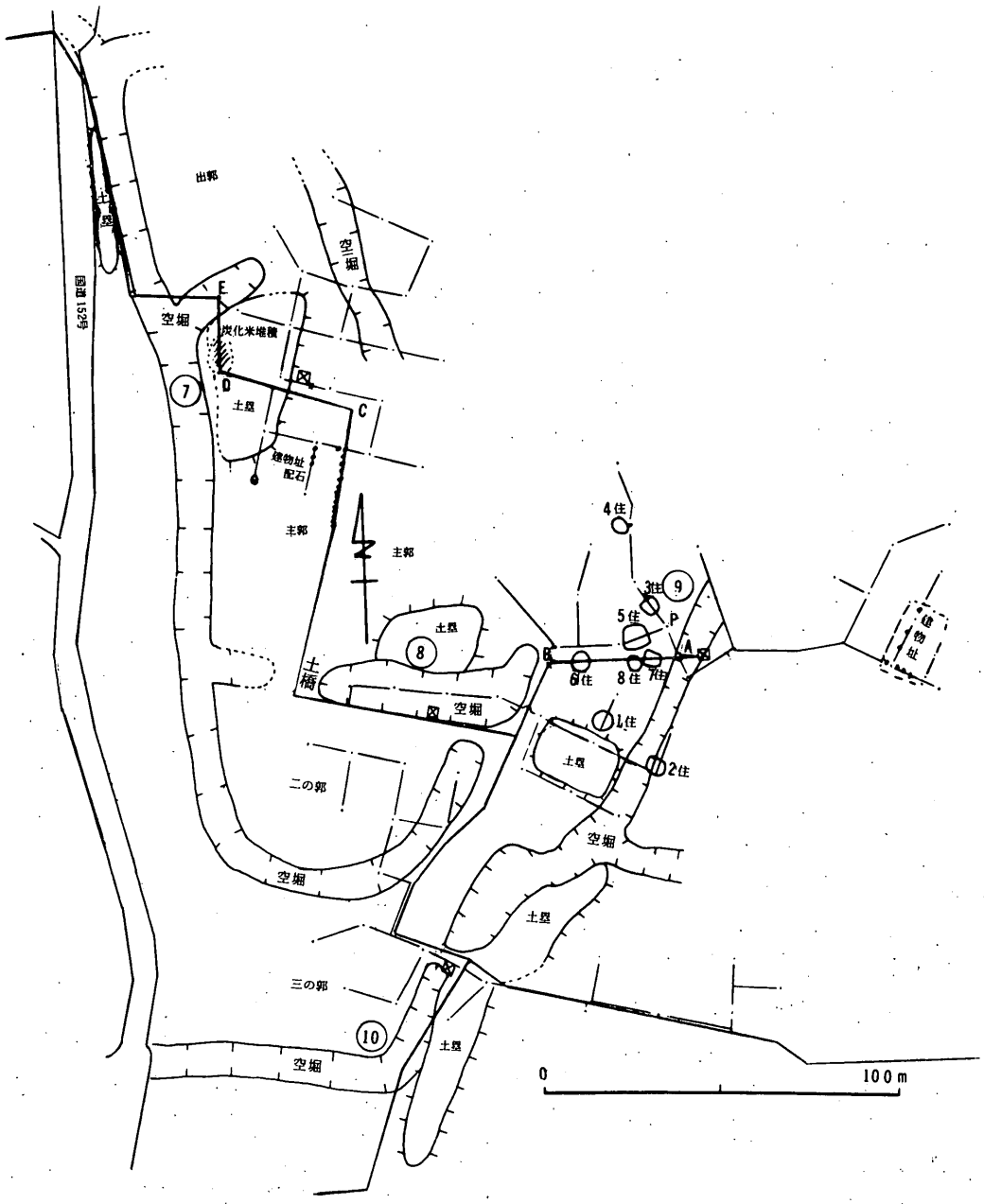


図15　内御堂遺跡・知久平城跡立合調査検出遺構位置図（1：2,000）

工事終了時の埋土をみると礫が多く，遺物の散布もみられなかった。他の配管区は急な傾斜地で遺構，遺物はみられなかった。

古墳時代の遺物の大半は小片のみで図示したのは２号住居址出土（図16の１）の鬼高Ⅱ式とみる土師器の甕形土器で器面は平滑である。図16の２～４は５号住居址出土で２は須恵器の甕胴部片，３は須恵器の壷の頸部で沈線と波状文をめぐらす良質なものである。４は土師器の杯で内面黒色であり，鬼高Ⅱ式である。図示外の土師器片は多く，小片であり時期を決めがたいが，住居址の切あい関係からみて，鬼高Ⅰ・Ⅱの二次期があるとみられる。

平安時代の遺物は小片が僅かであり，国分式の甕片，須恵器の杯小片，灰釉陶器片の出土をみたにすぎない。図16の５は５号住居址上層出土の縄文後期の土器片である。

内御堂遺跡（図15）では台地の東側に集中して住居址８軒―縄文中期後半３軒，古墳時代後期４軒，中世後半１軒が発見されている。遺物は少なく，縄文時代では中期後半Ⅲ期の小片で図示したのは図17の１～５である。１は１号住居址出土の土偶の手である。石器には打石斧と石錘の出土をみている。古墳時代後期の遺物は小破片の土師器と５号住居址より須恵器の小片の伴出をみている。中世の２号住居址は中世末の陶器片とスズリ小片の出土をみている。

知久平城跡については，昭和14年長野県史蹟名勝天然記念物調査報告書（第二十輯）に市村咸人先生が知久平城址に詳細に述べられ，知久平城址及其附近図をのせられている。これをもとに立合調査をすすめたもので，新たに確認された空堀・土塁・土橋を加え知久平城跡及び周辺図（図18）を作成した。さらに

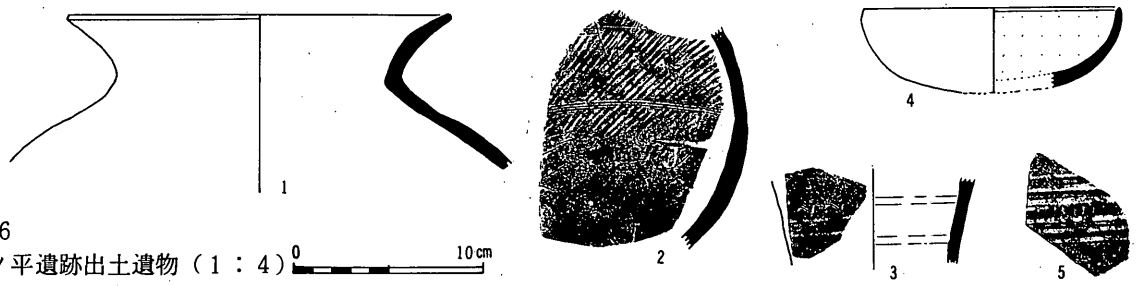


図16
宮ノ平遺跡出土遺物（１：４）
１……２住，２～４……５住，　５……５住上層

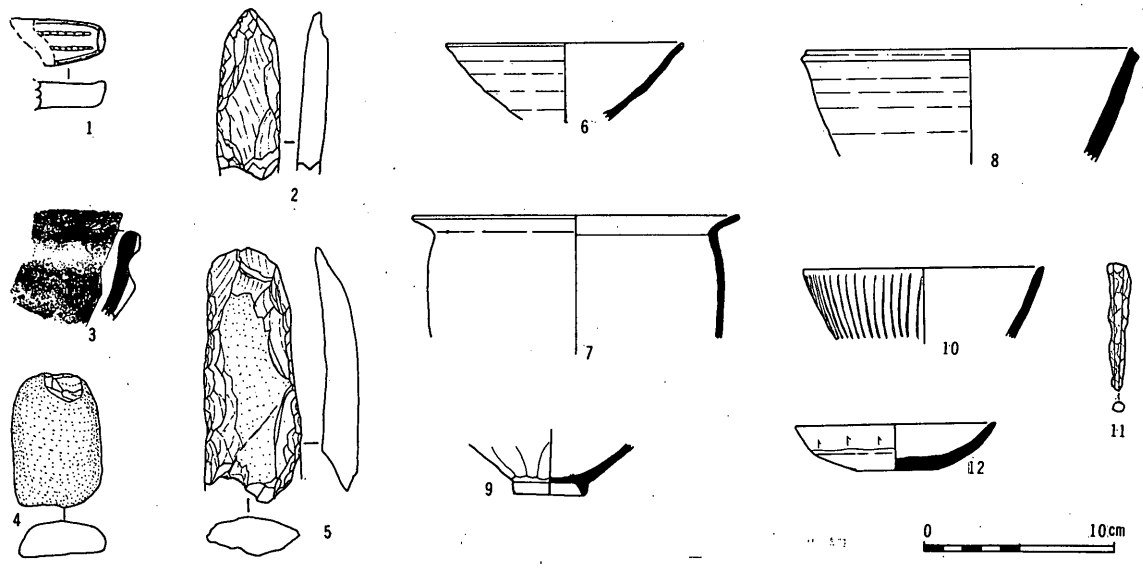


図17　内御堂遺跡出土遺物（１：４）
１・２……１住，　３～５……６住，６～11……知久氏館址，　12……知久平城跡

発見された建物址とみる遺構も加えた。

主郭の地表下60cmには配石列・柱穴列・礫詰等が発見されており建物址とみられる。ここよりの遺物には山茶碗・素焼土器・青磁（図17の10）・白磁（図17の９）・中津川窯産の大甕片の出土をみている。山茶碗（図17の６・８）は鎌倉末から室町初頭の白土原―Ⅰ期であり，大甕も同時期であり，知久氏館址の所在を示す資料といえよう。

内御堂東の侵蝕谷に面す台地端部に発見された柱列と礫詰は建物址を示すものであり，遺物は発見されなかったが，知久氏の居館に関連するものと考えたい。図17の12は知久平城跡に関連する中世末の皿である。

内御堂台地北西端に発見された炭化米の層については，十分な把握はされなかったが，今後究明すべき課題である。知久平城跡については環境の項を参照されたい。

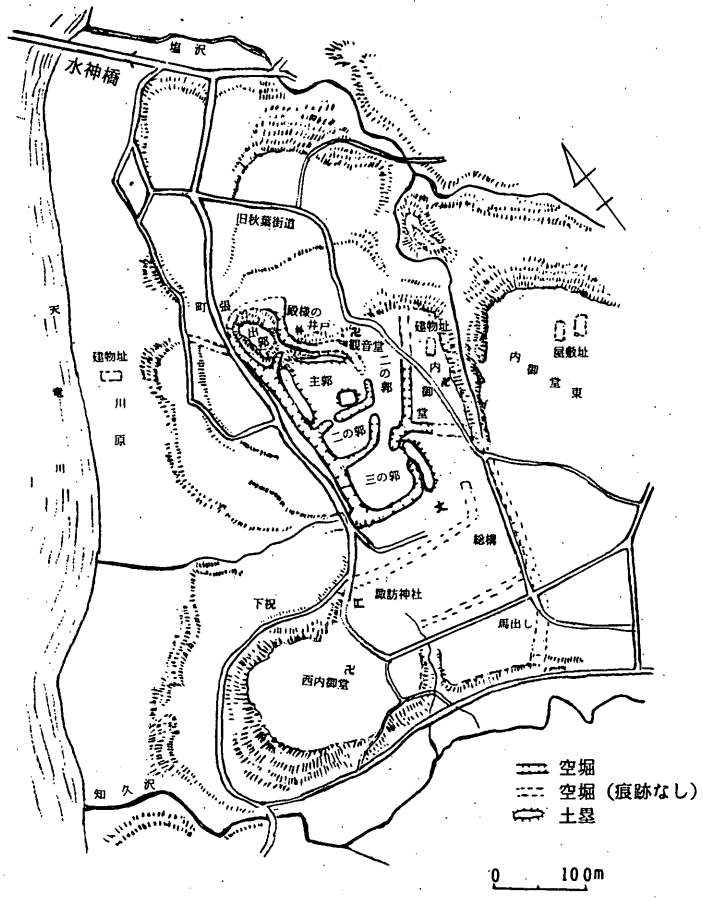


図18　知久平城跡及び周辺図

向新道地遺跡（図19）は，調査区域の東端に遺跡がかかり，大部分は牧之内原と呼ばれる地域である。遺跡で発見された住居址は平安時代の１軒で，土師器片１点を検出したにすぎない。遺跡の中心は配管工区より東にあり，また遺構の存在が予想された20・18配管区はかつて重機により削りとられていた。

牧之内原を東西に旧秋葉街道の道筋となっており，国鉄飯田線（伊那電鉄・三信鉄道）開通前までは遠山地方を結ぶ交通の要路であった。古くからの道筋であり，神ノ峯城と知久本郷（知久平）を結ぶ主要路であり，中間地点にある牧之内原は神ノ峯城の前線基地にあたる位置にある。標高520ｍ前後の残丘で，北・西・南は段丘崖となり，尾根地形をなしている。土地の言い伝えには「牧之内」は知久氏の馬の放牧場―牧であったといわれている。

台地の東端部は向新道地の丘陵が下がってきた地点で狭小となり，ここを空堀が南北方向に掘りこまれ南側中央部の傾斜面の空堀，西端の台地縁部に沿う空堀の存在が確かめられた。また，南西の台地縁部のマウンドに柱穴２こが検出され，建物址の存在が予想された。

空堀・マウンドと建物址とみる遺構は神ノ峯城の前線基地としての施設があったものとも推定され，地形的にも，またこれら遺構からみて牧の存在も予想される。

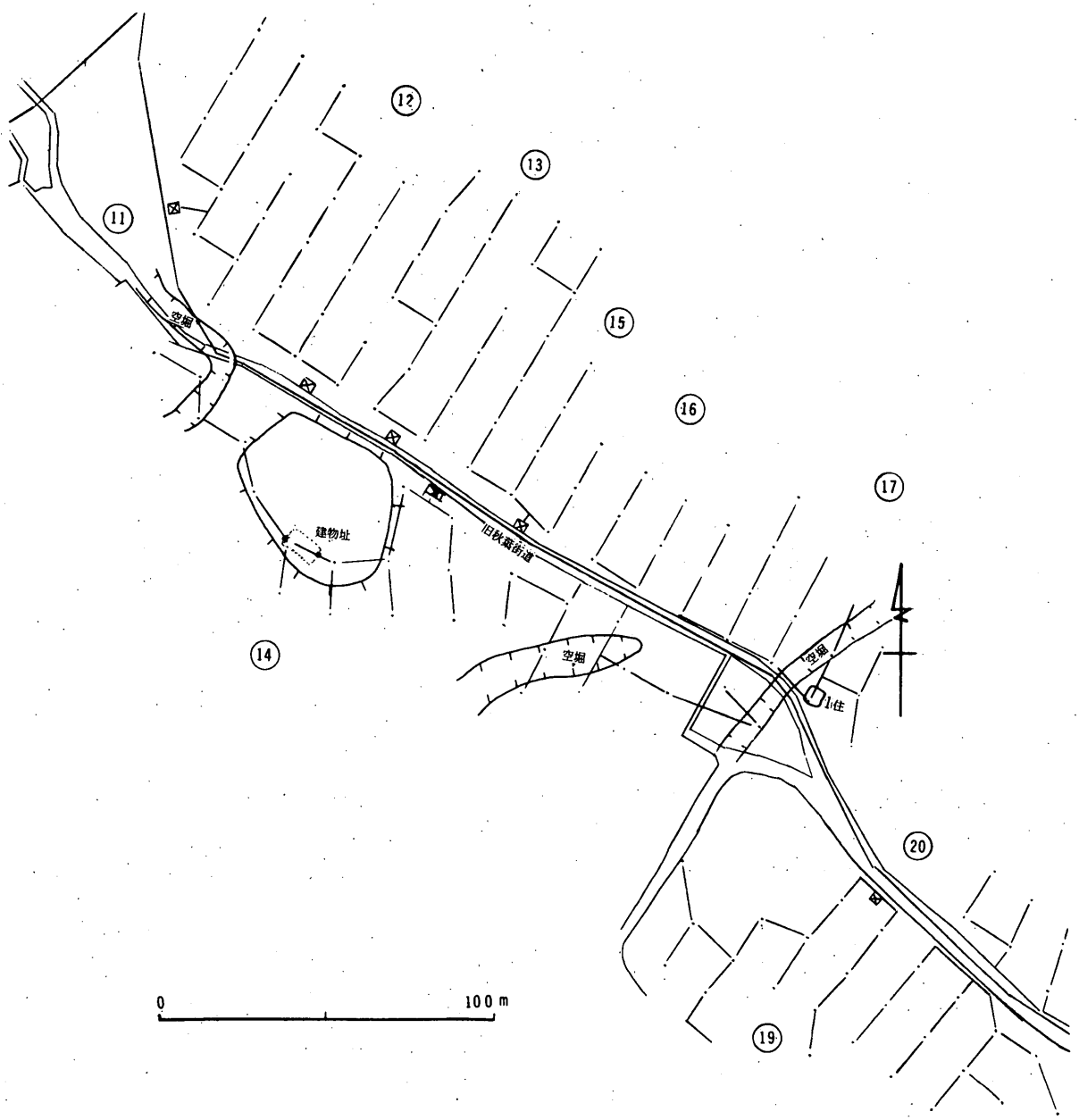


図19　向新道地遺跡立合調査検出遺構位置図（1：2,000）

今次畑灌水工事立合調査によって，庚申原が縄文中期勝坂期の遺跡であることが確認され，宮ノ平遺跡では古墳時代後期，平安時代の集落址が，内御堂遺跡では縄文中期後半・古墳時代後期の集落址の存在を知ることができた。知久平城跡の規模・構造について新発見があり，知久氏館址の時期・所在を示す資料が得られ，川原遺跡・牧之内原に知久氏の防御施設を示す遺構が発見される等，広範囲に行われた立合調査のもつ意義は大きいといえよう。

おわりに，立合調査にあたって工事を請負われた平和工業ＫＫ・吉川建設ＫＫ・北沢建設ＫＫの御理解協力があり，作業にあたられた方々の狭い配管溝の中での遺構・遺物の検出に，また雨上りや上解けの泥だらけになった日も多い中で献身的に協力いただけたことを深謝したい。　　（佐　藤　甦　信）

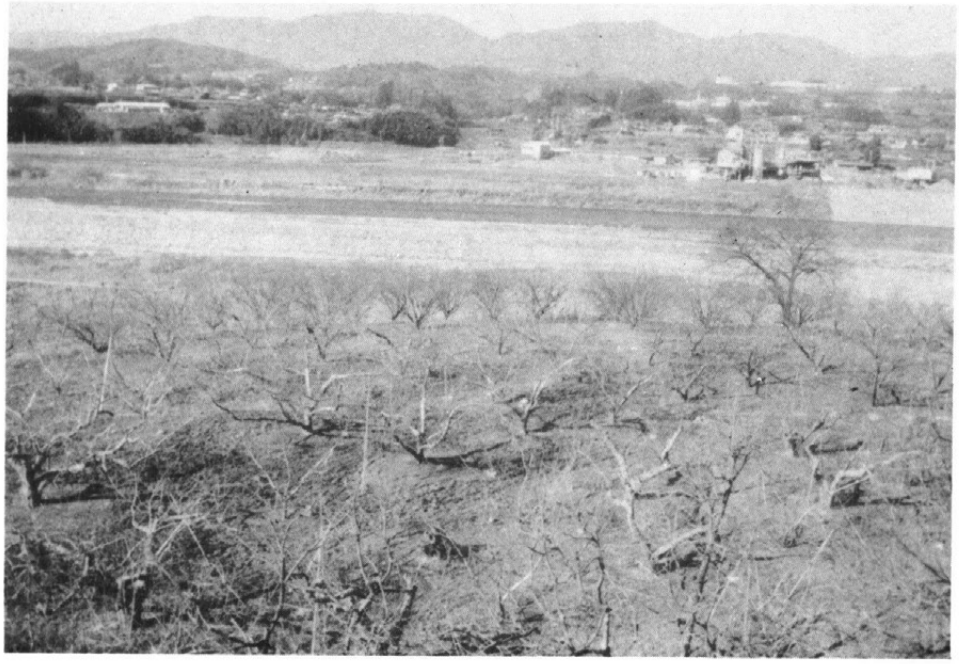
図　　版

松尾城跡からみた知久平地区の遺跡

1.　川原遺跡　　2.内御堂遺跡と知久平城跡　　3.　知久平城出郭
4.　宮ノ平遺跡　　5.　向新道地遺跡（牧之内原）

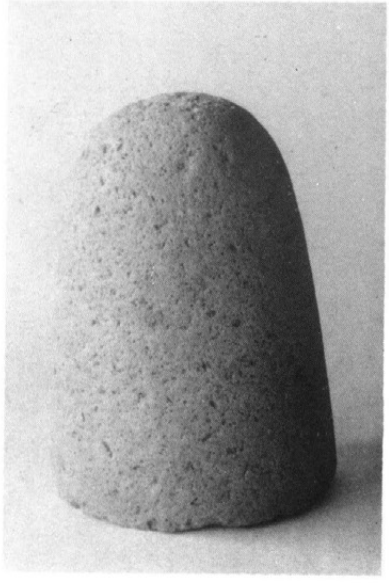
東からみた知久平段丘面の遺跡

1.　知久平城跡・内御堂遺跡　　2.　内御堂遺跡東　　3.　宮ノ平遺跡



川　原　遺　跡

配管溝の調査



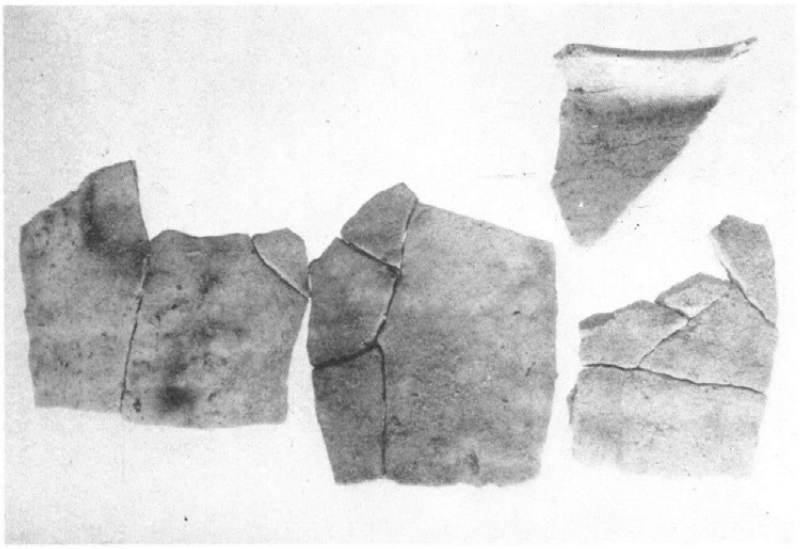
川原遺跡８号住居址出土石棒

向新堂地遺跡

知久平城跡下層の配石

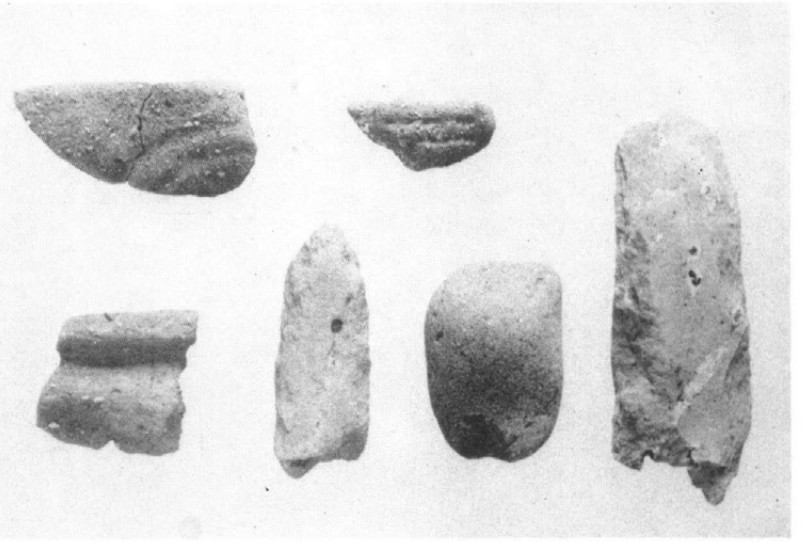
知久平城跡下層の配石

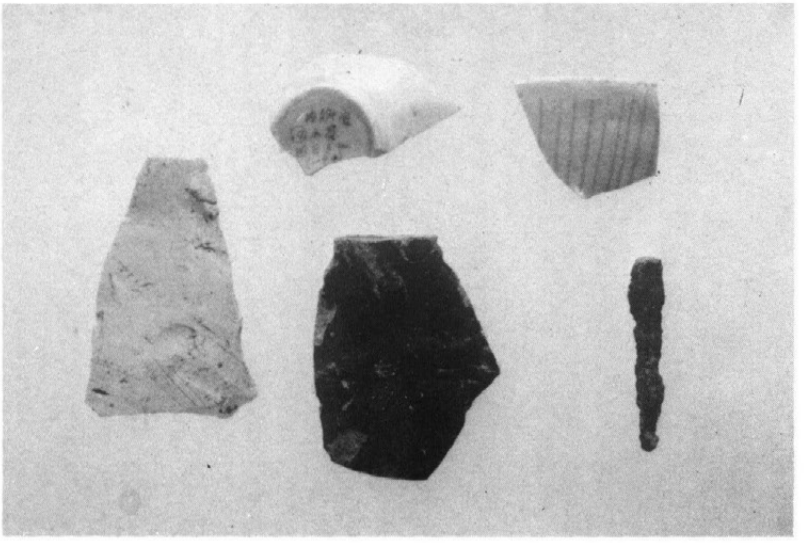
知久平城跡炭化米出土状況



宮ノ平遺跡出土古墳時代後期土師器

内御堂遺跡出土縄文中期後半の遺物
上中は土偶の手





知久平城跡下層出土遺跡
上右……青磁碗，　左……白磁
下左……大平鉢片，
中……中津川窯大甕片

お　わ　り　に

小渋川より取水した水を竜東一貫水路として松川町生田地区・豊丘村・喬木村・飯田市下久堅地区の中位段丘地帯を通し，畑地帯に灌水し，農業の近代化と生産の向上を計るため県営小渋川畑地帯総合整備事業が年次計画で行なわれ，飯田下久堅地区内では，工事に先立って昭和54年度には中尾・天神遺跡の発掘調査が行なわれ，その報告書「中尾・天神遺跡」が長野県南信土地改良事務所・飯田市教育委員会によって発刊されている。

昭和55年下久堅地区再編農業構造改善事業として北坪工区が実施されることになり，それに先立つ内御堂遺跡東端部の発掘調査が行なわれ，その報告書「内御堂遺跡」が飯田市教育委員会によって刊行されている。

昭和56年度，下久堅地区に畑地帯灌水工事が行なわれることになり，工事区域には下虎岩区には庚申原，観音原，藤塚原遺跡，知久平区には川原・宮ノ手・内御堂・向新道地遺跡があり，このため南信土地改良事務所の委託により，飯田市教育委員会が受託して配管工事に立合調査を実施されることになった。

調査は昭和56年10月７日より，57年１月13日にわたり，工事の進行に従って順次行なったものである。狭い配管溝内での遺跡・遺物の検出は決して容易なものでなく，調査遺跡も谷を隔て，急な段丘崖を登り下りしての調査で苦労を要したものである。

調査の結果からみると，庚申原では新しく縄文中期の遺跡であることが知られ，知久平工区では宮ノ平遺跡の古墳時代後期集落の存在の新発見，内御堂を中心とした知久氏館址の確認，知久平城跡の規模・構造等について城跡図への加筆等，立合調査のもつ意義は大きかったといえよう。

報告書作成は契約によって昭和57年度事業とされており，ここに報告書が刊行されたことに対し，調査を担当された佐藤甦信団長をはじめ作業にあたられた方々，また，立合調査に御理解・協力された平和工業ＫＫをはじめとする工事請負業者に深くお礼を申し上げたい。

昭和58年３月

飯田市教育委員会

発　堀　調　査　組　織

1. 飯田市教育委員会

林　　研　二	教育長
福　井　　実	教育次長
竹　村　宗　丘	社会教育課長
池　田　明　人	〃　文化係長
小　林　正　春	〃　文化係
家　田　昌　子	庶務課

2. 調　査　団

団　長　　佐　藤　甦　信

作業員	牧　内　佳　子	福　島　明　夫
	北　村　重　実	中　平　兼　茂
	柳　沢　八重子	佐　藤　いなゑ
	田　口　さなゑ	

知久平遺跡群

1983・3

発　行　長野県南信土地改良事務所
　　長野県飯田市教育委員会

印　刷　株式会社　秀　文　社